

近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

——宇佐美延枝『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』を中心として——

勝 山 稔

問題の所在

筆者は戦前期の支那愛好者の訳業について収集整理を進めている^{〔一〕}。なぜ本研究で民間知識人に注目したのかというと、この時期の日本における中国通俗文学の受容に「とある異変」が発生していたからである。その異変とは何かというと、この時期に大学の専門家の殆どが白話小説の翻訳をためらい、江戸時代から連綿と続けられていた白話小説の受容が停頓状態に陥っていたからである。

この受容停頓の原因については、既に別稿^{〔二〕}で検討している。それによると、中国文学研究における白話小説の地位の低さ、それに伴う研究環境の冷遇、そして翻訳に踏み切るだけの「白話小説を正確かつ精緻に逐語訳することができただけの研究水準」に、当時の白話小説研究が到達しておらず、厳格な逐語訳を旨とするアカデミズムからの立場から見れば、克服しなければならない語釈上の問題が数多く山積していたからである。

それでは、この状況下で、明治大正期や戦前の受容を支えたのは誰かという点、中国文化を愛好する在野の知識人であった。彼等は独自の学識で『三国志』『西遊記』『水滸伝』等の翻訳を発表、現在

の日本でこれらの作品が深く人口に膾炙される存在となったのは、アカデミズムに由来する研究成果ではなく、実は支那愛好者の尽力に他ならない。

ところが、彼等の活動の実態は殆ど判っていない。先行研究では部分的に言及されることはあっても、本格的な分析は、高島俊男氏による『水滸伝』の研究^{〔三〕}を除けば、ごく一部の作品の事例に限定されているに過ぎない。

そのため筆者は、中国通俗文学史の中で重要な位置にある短篇白話小説集・「三言」^{〔四〕}（『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』）所収篇における支那愛好者による受容事例の発掘作業を試みている。そのため本論は複数の拙稿^{〔五〕}にまたがる考察である所から、論考の便宜上これまでの経緯を少しく説明したい。

これまでの研究では、明治期から昭和三〇年代までの「三言」所収篇の翻訳に携わった人物について論及してきた。しかし数年にわたる研究活動の結果、今まで翻訳に至る経緯が知られていなかった訳本の事例が幾つか発見された。

そこで小論では、筆者が発見した宇佐美延枝による翻訳『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』に注目し、宇佐美延枝が取り組んだ受容

近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

活動の一端を考察し、先行研究の不備を補完したいと考えている。

一・宇佐美延枝『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』の刊行について

『李謫仙 蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』（以下『抱甕文庫』と省略）^{〔五〕}は、明治三一（一八九八）年に刊行された「三言」所収篇の翻訳集である。表紙に「菊の屋女史訳」とあるように翻訳は女性の手によるもので、奥付には、訳者兼版權所有者として牛込区東五軒町三十五番地の宇佐美延枝（以下小論では、訳者を宇佐美延枝に統一し、「宇佐美」と省略する）の名がある。管見の限りに於いては「三言」所収篇の翻訳史上初の女性翻訳者と思われる。

『抱甕文庫』は、稀覯本が多い「三言」所収篇の翻訳の中でも、屈指の稀覯本である。本書は、国立国会図書館に一冊所蔵されているが、全国の公立図書館及び全国の国公立大学附属図書館には、一冊も収蔵されていない。

宇佐美について、筆者は発見当時の前稿で「訳者の宇佐美延枝が如何なる人物であったかは不詳」^{〔六〕}とし、その根拠として『抱甕文庫』が、二〇〇六年一月二六日に著作権法第六七条による文化庁長官裁定を受けたこと。そして著作権法第六七条「著作権者不明等の場合における著作物の利用」では、「公表された著作物又は相当期間にわたり公衆に提供され、若しくは提示されている事実が明らかである著作物は、著作権者の不明その他の理由により相当な努力を払つてもその著作権者と連絡することができないときは、文化庁長官の裁定を受け、……その裁定に係る利用方法により利用することが

できる。（傍線筆者。以下同じ）」とあり、国会図書館で「著作権者の不明その他の理由により相当な努力を払つてもその著作権者と連絡することができない」と判断している点を挙げた。

ただ、その後の調査によって『抱甕文庫』については徐々に解明の手がかりが見つかってきている。例えば一八九八年五月二三日『読売新聞』朝刊第八面には「菊廼屋女史訳 近刊ノ小説抱甕文庫 李謫仙蘇小妹 洋装美本定価金廿五銭郵税金二銭」と近刊予告の広告があり、その柱の下で「略」弊院幸に出版の榮を得爾後逐篇刊行して之を紹介せんとす」という紹介文が確認されるほか、奥付の刊行年月日を手がかりに官報掲載の版權登録を確認すると、「著作権登録図書（筆者註・明治）三十二年六月二十三日登録」には、書名と「小説抱甕文庫 李謫仙蘇小妹 著作及版權所有者東京市宇佐美延枝」とあり^{〔七〕}、『抱甕文庫』で発表された翻訳についても各種雑誌に論評^{〔八〕}が行われており、稀覯本ではあるが、文壇における相応の反応が見られた事が明らかになった。

なお『抱甕文庫』の出版社「哲学書院」についても不明であったが、『東洋大学百年史』に「哲学書院の設立」の項目があり、哲学書院の設立から経営權譲渡までの社史が記載^{〔九〕}されている。

なお、訳者の宇佐美延枝については、現時点でも未詳^{〔一〕}である。しかし、「三言」所収篇の選集である『今古奇觀』の翻訳を刊行するに至った経緯については、宇佐美による自序で詳しく知ることが出来る。

抱甕文庫 自序

去る四年前より。醫生の慫慂に任せ久しきに互れる妾が身の病癪を養はんとて。帝都を距る程遠き片田舎に引籠りしが。今年の春に至り再び帝都に歸寓しぬ。此間滿る三年の春秋。(中略)固より片田舎の事にしあれば訪ひ來て慰めん人もなければ。尋ね行きて語らはん友もなく。いと徒然に堪えかねるまゝ。書篋の底などかい採い。古本雜誌類の中より。(1)今古奇觀となんいふ小説の四十回ばかりあるを取り出し試に繙きて讀みぬ。件の一書は大方諸彦の皆知り給ふ如く。支那短篇小説の中間とも著名なるものにて。吳中抱甕先生の編輯せしものなり。讀みもてゆくに文意の會得しがたきところあり。又文字など脱落磨滅して讀み得ぬところも多かりけるが。文作の一助とも思ひて惟拾ひくゝに二十回ばかりを繙譯せり。元來支那の文字には能くも熟せぬものなるに。文作りなれぬ拙き筆もて繙譯せしことなければ。(中略)此頃哲學書院の主人高頭翁訪ひ來りて四方八方の物語の序。支那小説の事など云ひ出られぬるに。端なくも本書繙譯の事を口走り。辭めども得ずして竟にこれを取り出して示しければ。持ち行きて一覽せばやとて其儘携へ去られぬ。日數経て復た尋ね來り云はるゝやう。(略)(2)彼三國志水滸傳西遊記などの類は久しき以前より繙譯して江湖看客の閱覽に供せらるゝも。其他に至ては寥々晨星も啻ならず。原書は各種輸入せられて江湖に散在すと云ふとも。極めてよく支那の文字を解釋する人にあらざるよりはこれを讀むも争て其意を了解し得ん。支那小説繙譯の今日に急なることこれにて思ひ半ばに過ぎん歟。然るに此度貴譯の今古奇觀を借覽したるに。篇中收むる

所の奇譚珍事は支那小説として固有の趣味と特種の曲調とを具へ。我等泰西小説を見慣れたるものに取ては目新しく面白き節々いと多く。これを惟家中に秘し置かれんこと中々あらた業なり。因て件の草稿は弊院に申受けて漸次に刊行し江湖同好の看客に紹介せんと欲す」と。妾これを聴きて驚くこと大方ならず。(中略)主人は更にも聞き入れ給はず。是非にとて再三再四迫られぬれば。竟に(3)其の詞に任せ原書は抱甕先生の編輯なるを以て。名をも抱甕文庫を題し一篇より十篇までを刊行することはしたり。繙譯の拙くして原書の意に適はぬふしあるは免れぬところにしあれば。冀くは大方の諸彦譯者の薄才淺學を憐み、其誤謬の指摘すべきものは教正を垂れて益を後進に與へ給はんことを。記して是が序と爲すと云爾。

明治卅一年四月帝都の北阪・礪川の邊なる茅屋に於て

菊の家女史識

自序は長文にわたるので、要約する。

筆者は医者薦めで東京郊外で三年間療養生活を送っていた。療養先は片田舎で東京からの見舞い客も少なく、徒然にまかせて書篋の中から古本雜誌類を繙いたが、その中に『今古奇觀』があり、文章の稽古のつもりで拙いながらも二〇篇ばかりを翻譯してみた。その頃哲學書院の主人高頭忠造が見舞いのため訪問した。四方山話の中で、支那小説の話題となった。その時にふと『今古奇觀』(筆者註・「三言」の選集)翻譯を話題に出し、翻譯を取り出したところ、高頭主人は「それは一読しなければ」と、そのまま翻譯を携えて持つ

て帰ってしまった。その後暫くして高頭主人が再び訪問してこのように述べた。それが傍線部(2)である。それには『三国志』『水滸伝』『西遊記』等の作品の類いは、かなり以前から翻訳が行われており人口に膾炙しているが、その他の支那小説の翻訳は僅かに過ぎない。『今古奇観』は各種が輸入され、江湖に散在はするが、支那の文字を解釈できる人がいないため、どうしてその作品内容を正確に理解出来るようか。として、筆者は高頭から文学に於ける小説の重要性と、支那小説の翻訳が極めて乏しいことを力説され、固辞しても再三再四出版を迫られ、遂に公刊に至ったとある。傍線部における高頭の出版理由であるが、これは当時における斯界の翻訳状況を的確に把握したものに相違ない。ただ「自序」を見る限りでは、当時の斯界における専門的な情報——例えば中国古典小説の評価が一定したものではなかったこと、そして白話語彙の研究が未熟な段階であったことは宇佐美も高頭も把握していた形跡は見えない(その点では増田涉や井上紅梅とは異なる)。そのため中国文学研究の観点から見れば、書肆の判断はやや時期尚早の観はあるが、高頭は泰西(西洋)小説と比較しながら中国の小説の意義を強調している。つまり明治以降の日本近代文学の発展を担った西洋の小説を、今度は中国から求めようとしたのであるが、斯界の事情に精通していない書肆の勧めが結果的に翻訳出版を促したことになる。

ここで注目すべきなのが筆者による『今古奇観』の翻訳である。右記傍線部(1)にも見られる通り、宇佐美は『今古奇観』の完本を持ち、全四〇篇のうち二〇篇を試訳を完了したとある。筆者による言及のみでは、実際に翻訳したのか否かは客観的な判断が付きにくい、その後翻訳が哲学書院で実際に刊行された点、また翻訳の

続刊が一〇編まで企画されていた点からも、二〇篇翻訳の可能性は低くはない。「三言」所収篇の訳者の中で二〇篇以上の翻訳が確認出来るのは、戦前期の支那愛好者である井上紅梅(一八八一—一九四九?)まで待たなければならず、短篇白話小説受容史の観点からは、宇佐美の存在は看過できないことが理解出来るよう。

なお傍線部(3)の通り、シリーズ名は『今古奇観』の編者抱甕老人の名を取って『抱甕文庫』と付け、翻訳は二〇篇を二篇ずつ一〇回に分けて刊行する予定とあるが、現在確認されているのは第一篇のみである。

その第一篇は、以下の二篇の翻訳を扱った。

- ①「李謫仙」(『警世通言』巻九・『今古奇観』巻六)
- ②「蘇小妹」(『醒世恒言』巻一一・『今古奇観』巻一七)

なお『抱甕文庫』の続篇についてであるが、現時点の調査では第二篇の刊行は確認できていない。恐らくは第一篇のみの刊行にとどまったと思われるが、今後の継続的な調査にその有無を委ねることとしたい。

二・宇佐美延枝『李謫仙・蘇小妹(抱甕文庫第壹編)』の翻訳状況について

宇佐美の翻訳はいかなるものであったのか。「李謫仙醉草嚇蜜書」から一部を掲げる。ここでは、唐代の長安でのこと、玄宗皇帝が李龜年に李白を宮中に呼び出すよう命じられ、長安街の酒楼で李白の

歌声を聞き、連れて帰る場面を紹介する。原文では、

李白相他容貌非凡、他日必爲國傢柱石、遂喝住刀斧手、「(1)待我親往駕前保奏。」(2)衆人知是李謫仙學士、禦手調羹的、誰敢不依。李白當時迴馬、直叩宮門、求見天子、討瞭一道赦敕、親往東市開讀、打開囚車、放齣子儀、許他帶罪立功。子儀拜謝李白活命之恩、「(3)異日銜環結草、不敢忘報。」此事閣過不題。是時、宮中最重木芍藥、是揚州貢來的。如今叫做牡丹花、唐時謂之木芍藥。宮中種得四本、開齣四樣顏色。那四樣。

大紅 深紫 淺紅 通白

(4)玄宗天子移植于沉香亭前、與楊貴妃嬪嬪賞玩、詔梨園子弟奏樂。天子道、「對妃子、賞名花、新花安用舊麴。」遽命梨園長李龜年召李學士入宮。有內侍說道、「李學士往長安市上酒肆中去瞭。」龜年不往九街、不走三市、一徑尋到長安市去。只聽得一箇大酒樓上、有人歌云、

三杯通大道、一門閣自然。

但得酒中趣、勿爲醒者傳。

李龜年道、「(5)這歌的不是李學士是誰。」大踏步上樓梯來、只見李白獨佔一個小小座頭、桌上花瓶內供一枝碧桃花、獨自對花而酌、已喫得酩酊大醉、手執巨觥、兀自不放。龜年上前道、「聖上在沉香亭宣召學士、快去。」衆酒客聞得有聖旨、一時驚駭、都站起來開看。李白全然不理、張開醉眼、嚮龜年唸一句陶淵明的詩。

(李白はその非凡な容姿から見て、他日必ず国家の柱石となる人物だと思い、大声で首斬り役人を制止した。)(1)わしが陛下

におとりなしをしてくるから、それまで待て」(2)みんなの者は、それが李謫仙學士で、天子がお手ずから吸物をととのえられた人だということを知っていたので、聞かないわけにはいかなかった。

李白はすぐに馬をかえし、まっしぐらに宮中へいって天子に謁見を請い、赦免の敕書をもらい受けると、自ら城東の広場にいてそれを宣読し、囚人車を打ちあけて子儀を釈放し、彼が功を立てて罪をつぐなうことを期待した。子儀は李白が命を救ってくれた恩を拝謝し、(3)いつかはその恩返しをしようと、片時もそれを忘れることはなかったが、この話はこれでとどめる。

そのころ、宮中では木芍薬がもっとも珍重されていた。これは揚州から献上されたもので、今は牡丹と呼んでいるが、唐のときには木芍薬といったのである。宮中には四株植えてあって、四色の花が咲いた。その四色というのは、

大紅 深紫 浅紅 通白

(4)玄宗皇帝はそれを沉香亭の前に移し植え、楊貴妃とともに花を愛でながら、梨園の子弟に音楽を演奏させられることになった。「貴妃とさしむかいで名花を愛でているのに、新しい花に古い曲では風情がない」と思い、急に梨園の長の李龜年に、李學士を宮中に呼びよせるよう命じられた。内侍の者のいうには、「李學士は長安街の酒店へいっておられます」とのこと。龜年はほうほうをさがしまわることもなく、まっすぐに長安街へいった。と、ある大きな酒楼で誰かが歌っているのがきこえた。

三杯大道に通じ

一斗自然に合す

ただ酒中の趣を得たり

醒者の為に伝うる勿れ

「(5) あの歌は李学士にちがいない」李龜年はそう思い、大股に酒樓の階段を上っていつて見ると、李白が小さな席に一人で坐っていた。卓上の花瓶には白桃が一枝さしてあって、李白は独りその花と向かいあつて飲んでゐる。もうすっかり酔つていたが、大きな杯を持つて、なかなか放しそうにもない。龜年が傍へ寄つて、「陛下が沉香亭でお召しでございます。はやくお出ましくさいますよう」というと、酒客たちは陛下のお召しときいてはつと驚き、みんな立ちあがつてじろじろ眺めた。李白はいっこうにかまわず、醉眼を見開くと、龜年に向かつて陶淵明の詩の一句をつぶやいた。」

とある場面を、『抱甕文庫』では次のように訳出している。

李白は、其容貌の非凡なるを相し。こゝろに他日は必ず國家の柱石とも爲るべしと信ぜしかば、直ちに刀斧手等を喝りとゞめ、(1) 我思ふ由あれば、親しく陛下の駕前に往きて、敕敕を奏請するを待てよと申しける、(2) 人々は、皆李謫仙學士は天下御手づから調羹して、食べしめ給ふ程の恩幸者なるを知りければ、誰れとて敢て違ふものあらんや。李白は早急に馬を回して宮門に入り。天子に謁し郭子儀の爲め敕敕を奏請し奉りて、其准しを得、再び東市に趣きて詔を讀み聽かせ、竟に囚車を打

開きて郭子儀をば放ち出し、他日國家の爲め功を立て績を成さしめんとぞ期したる、子儀は圖らずも、李白が高義に因りて處斬を免かれ、深く其活命の恩を謝し、(3) 異日銜珠結草、敢て報を忘れざるべしとて別れ去りけり。〔此事閑過不題。〕

却說、宮中にては、其時頃、分けて木芍薬を愛重せられしが、這是楊州より獻呈し來るものにて、近時は牡丹花と呼びなせども、唐時はこれを木芍薬とこそ稱しけれ、宮中には四種の木芍薬、今を盛りに開き出で、四様の花の色、

大紅なるあり 深紅なるあり 淺紅なるあり 通白なるあり

(4) 濃きも、薄きも夫々の風姿、最と見榮ありて見ゆるが、一日、玄宗皇帝は沉香亭の前に御座まして、楊貴妃と共々賞玩措かず、傍ら梨園の子弟して、樂を奏せしめなどし、何か感しさせ給ひけん、楊娘々に向はせられ名花を賞するに何とて舊曲を用ひんやとて遽に梨園の長、李龜年に命して、李學士に召し來らしめ給ふ、時に一内侍ありて李學士は長安市上の酒肆中に往き去りぬと告げしかば、龜年は九街三市も一足飛び、急ぎに急ぎて、長安市上に尋ね到れば、只有る酒樓の上に何人か歌ふ聲あり。

三杯通大道、一門閣自然。

但得酒中趣、勿爲醒者傳。

龜年は、這歌を聞き、(5) これ必ず李學士ならんと、自ら點頭き、直ちに樓の梯子を駆け上りて見れば、李白は、案に違はず獨り一小座を占め、卓上の花瓶には一枝の碧桃花を供し、花

に對して自から酌み、酌みに酌みてや、酔も廻りて、酩酊々手に巨洲を執り、兀自として放ちもやらぬ光景なり。龜年は前みて高やかに、『李學士よ、聖上は、沈香亭に御座まして、學士を召し給ふ、快く來らずや。』

此時しも、樓上の衆客は、聖旨と聞きて驚駭一番、總立となりて李白の身邊に圍繞しぬ。李白は、龜年が言も耳に入らず、全然解せぬ態にて、僅に醉眼を看開き、陶淵明が詩中の一句を吟じ出しぬ。

このように宇佐美の文体は、漢字仮名まじりによる散文体が採用され、当時ようやく普及し始めた（日本語の）言文一致体^{「二」}による口語ではなく、文語体の古文に近い文体を用いている。

なお翻訳の姿勢については概ね原文に即して忠実に翻訳を試みており、翻訳水準も低くはないが、一部難解語彙の対応に苦慮している場面が見えるほか、多少内容説明の必要からか、原文にない訳者独自の加筆が散見される。

例えば傍線部分（1）「待我親往駕前保奏」は、逐語訳すれば「私が自らが駕前、つまり天子の車駕の前に往き、保奏（天子に対し人物を推薦保証）するまで待て」の意味である。「我」とある主語は当然李白であり、天子（玄宗皇帝）に保奏するのは郭子儀である。この箇所を宇佐美は、「我思ふ由あれば、親しく陛下の駕前に往きて、敕赦を奏請するを待てよと申しける」と翻訳する。「保奏」は、天子に推薦し上奏するという意味であり、前後の文脈から見れば、上奏の内容は郭子儀の赦罪に相違ない。そのため宇佐美は文脈を読み込んで「敕赦を奏請」とまで踏み込んだのだろう。的確な翻訳であ

る。ただ郭子儀の赦罪を文意に反映させたとしても「我思ふ由あれば」とまで解釈できるのか、難しい。

また傍線部（2）「衆人知是李謫仙學士、禦手調羹的、誰敢不依」は、「禦手調羹」が極めて難解である。「禦手（yù shǒu）」は、文言で「御者」の意味であるが、白話語彙では「皇帝の御手」を言う。「調羹（tiáo gēng）」は散蓮華、もしくは白話語彙では宰相が自ら国を治めることもあるが、恐らくは前者の解釈であろう。逐語訳をすれば「皇帝自御らが散蓮華を（持たれた）」というニュアンスではある。「禦手調羹」は四文字で何らかの故事来歴の存在が想起されるが未詳である。恐らく「禦手調羹」は「天子が御自ら散蓮華を持たれる程寵愛された」のが李白である、という寵愛の程度を示す連体修飾語と判断できる。そのため「人々は、天子が御自ら散蓮華を持たれる程寵愛した李謫仙學士であつたので、誰が敢えて（李白の発言に）従わないことがありましようか、いや（李白の発言に）従わなければならなかつた」のである。ここで宇佐美は「人々は、皆李謫仙學士は天下御手づから調羹して、食べしめ給ふ程の恩幸者なるを知りければ、誰れとて敢て違ふものあらんや」と訳している。「禦手」は白話語彙を正確に訳出しているが、さすがに「調羹」は不詳であつたのか、動詞に訳し原文にはない「食べしめ給ふ程の恩幸者」と加筆している。

次の傍線部（3）の「異日銜環結草、不敢忘報。此事閻過不題」であるが、「銜環（xián huán）」は『續齊諧記』所載の漢代楊宝の故事^{「三」}に由来して、恩に報いること、「結草（jié cǎo）」も『春秋左氏伝』所載の春秋時代晉の魏顆の故事^{「三」}に由来し、死後に恩に報いる意味である。一般的には「結草銜環」とすることが多い。そのためここでは「他日恩に報いようと」とすべきである。そして「不

「敢忘報」は「忘れないように努めた」の意味で、「此事閣過不題」の「閣(お)」は「閣(お)」と同一で「閣く」の意味である。そのため「この話はさておく」という白話小説の決まり文句の一種と考えた方が妥当である。この箇所を宇佐美は「異日銜環結草、敢て報を忘れざるべし」と別れ去りけり」と「異日銜環結草」を音読みするにとどめて訳出せず、「不敢忘報」のみ「敢て報を忘れざるべし」と翻訳し、「此事閣過不題」は無視している。

傍線部(4)の「玄宗天子移植于沉香亭前、與楊貴妃嬪嬪賞玩、詔梨園子弟奏樂」は、直訳すると「玄宗天子(皇帝)が沉香亭の前に移植し」であり、何を移植したのか省略されているが、これは前文にある宮中に植えてあった「四様顔色(四色の)」の木芍薬である。そして玄宗皇帝は楊貴妃とともに木芍薬を鑑賞しながら、梨園の子弟に何か演奏をさせようとしたという内容である。この箇所を宇佐美は「濃きも、薄きも夫くの風姿、最と見榮ありて見えけるが、一日、玄宗皇帝は沉香亭の前に御座まして、楊貴妃と共に賞玩措かず、傍ら梨園の子弟して、樂を奏せしめなどし、何か感しさせ給ひけん」としている。冒頭の一文は木芍薬の形容に相違ないが、これに対応する原文はない。また「玄宗天子」を主語とする動詞「移植」を訳さず「賞玩措かず」としているほか、最後の「何か感しさせ給ひけん」も原文にはない表現である。

そして傍線部(5)の「這歌的不是李学士是誰。」は、この歌(の作者)は李学士でなければ誰だというのだ(いや李学士以外にはありえない)という反語表現であるが、そこを「這歌を聞き、これ必ず李學士ならん」という具合に、反語を曖昧に訳しているほか、「自ら點頭き」とか「直ちに」など、原文にない表現が加えられている。

その他にも右掲の訳文に点線で示したが、「却説」「只有る」など原文にない言い回しが散見されるが、何れも白話小説特有の表現であり、ここからも訳者は語彙に精通していることは想像に難くない。

自序でも訳者の意志に反して刊行されるに至った経緯と弁解を長々と説明し、『抱甕文庫』は厳密な翻訳を目的としたものではなく、「徒然のあまり文作る稽古」のためだったと繰り返し断り書きを行い、「冀くは大方の諸彦訳者の薄才浅学を憐み、其誤謬の指摘すべきものは教正を垂れて益を後進に与へ給わんことを」^{十四}など、不自然とも思われるほど翻訳刊行に恐縮する文面が随所に見える所からも、本書刊行は当人の本望ではなかったものと思われる。

確かに訳文を見る限りでは一部の特異な白話語彙には対応できていない箇所や、然程解釈が困難ではない箇所についても、場合によっては読者への配慮なのか文脈を重視して意識を施している箇所が認められ、その頻度も佐藤春夫訳・井上紅梅訳に比べても若干多く、鈴木真海訳と同じ程度の加筆潤色が見られる。その意味ではやや原文に忠実な翻訳と言いたい。しかし明治三一(一八九八)年当時は、白話語彙に関する工具書も十分になく、且つ中国人の助力もない状況で、①比較的高い水準で翻訳を刊行したこと、②出版計画は頓挫する結果となったが二〇篇の翻訳を行い、一〇篇の出版を企画したこと、③初めの女性翻訳者であること、そして、④訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡期的な存在として、「三言」所収篇の受容史の上では画期的な存在であると言える。

四・受容史上における宇佐美訳の位置付け

それでは、受容史の上から見た宇佐美訳の位置付けは、いかなるものであったのか。検討を行いたい。

「三言」所収篇の受容史という観点から、宇佐美訳の意義を検討すると、真つ先に考えられるのが、散文体による翻訳を採用したという点である。これは明治大正期における白話小説受容史が直面した問題——すなわち白話小説の口語訳化に関わる一連の問題を解くケース・スタディとして注目に値するからである。

以下、宇佐美訳における白話小説の口語訳化の問題を中心に論じるが、そもそも「白話とは何か」が解らないと、口語訳化の問題は理解できない。

そのためここでは、まず「白話とは何か」を説明する。その上で当時の口語訳化をめぐる問題を、先行する事例（『勸懲繡像奇談』『露団々』と佐藤春夫訳『百花村物語』との関係について紹介し、口語訳化を巡る問題点を明確化した上で、宇佐美訳の位置付けを考察することとしたい。

白話小説の「白話」とは、明代前後の中国人が実際に話していた言葉（口頭語）を漢字表記したものがベースとなった口語文であり、文語文（文言）である漢文とは表現形態が大きく異なる。

その白話小説は、明清代に中国から日本へと伝播したが、江戸時代から明治時代までは従来の漢文訓読によって翻訳（訓読翻訳）が行われていた。それが大正時代から昭和初期にかけて、日本語の口語による翻訳（口語訳）が模索されはじめ、一般化する。本論で紹介した宇佐美訳は、その発表時期が明治三一（一八九八）年と、ま

さに訓読翻訳から口語訳へという翻訳形態の過渡期に位置する。そのことから、宇佐美訳は①古い伝統を持つ訓読翻訳から脱却した事例としての存在、そして②新しい口語訳に向けた先駆的な事例としての存在、という両面からとらえ直す必要がある。

小論では、紙幅の都合から殊に前者（訓読翻訳からの脱却）における宇佐美訳の位置付けに注目して考察することとしたい。

（一）明治時代に於ける訓読翻訳

宇佐美訳以前、中国白話小説の翻訳方法は、専ら訓読であった。

江戸時代から明治時代にかけての時期、まだ従来の唐話学^{とうわがく}の伝統に沿った漢文訓読による翻訳（訓読翻訳）の手法が一般的であった。工具書の定番として用いられている市川清流の『雅俗漢語訳解』^{【十五】}が明治一一（一八七八）年に刊行されているほか、多くの唐話辞典^{【十六】}がこの時期に刊行されていることも、当時の訓読翻訳の隆盛の証左とすることが出来る。

その中で「三言」所収篇の訓読例としては、明治一六（一八八三）年刊行の服部誠一『勸懲繡像奇談（一編）』^{【十七】}があげられる。

訳者の服部誠一（撫松）は、磐代出身の漢学者^{【十八】}で二本松藩の儒官の家に生まれた。彼は当初藩校（敬学館）の教授を勤めたが、廃藩置県で失職したのち著述業に専念し、明治七（一八七四）年に発表した『東京新繁昌記』によって一躍有名となった。服部は上京して昌平黉で学んだ経験もあり、漢学には造詣が深く、この『東京新繁昌記』も漢字仮名まじり文ではなく、所謂漢文体で書かれている。そのため『勸懲繡像奇談』の翻訳も白話の原文に施訓を付した^{【十九】}和

近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

刻三言」^{〔十九〕}以来の手法が色濃く残っていた。

服部の翻訳はいかなるものであったのか。「李暇公窮邸遇侠客」(『今古奇観』卷一六・『醒世恒言』卷三〇)の一節を紹介したい。

唐代天宝年間の長安のこと、うだつの上がらない士人の房徳が、とある古寺の壁に頭だけ描かれていない鳥の絵を発見し、それに絵に頭を書き足した。それをきっかけに彼が盗賊の頭領にまつりあげられる場面であるが、その盗賊がそれまでの経緯を説明する場面がある。その箇所を服部は、次のように翻訳している。

適マ雲華寺ニ来テ牆上不完ノ禽鳥ヲ画キ、便チ是レ衆弟兄天ニ対シ設下ノ誓願ヲ祷告ス。羽翼ヲ取テ俱モニ全ク単ニ頭兎ヲ少カク意思。若シ合ハバ該興隆ノ天、英雄好漢ヲ遺テ、這ノ鳥ヲ補足セヨ、便チ迎請シ来テ頭ト為サン。

(適来雲華寺牆上画不完的禽鳥、便是衆弟兄对天祷告、設下的誓願、取羽翼俱全、单少頭兎的意思。若合該興隆、天遺個英雄好漢、補足這鳥、便迎請来為頭。)

元来服部の業績を見ても、『孫呉講義』や『漢文読本』等の漢文関係の教科書や書道等の出版^{〔二十〕}が多く、白話の読解にも唐話学に依拠した訓読を試みたのは想像に難くない。しかし訓読による翻訳は、いわば文言文の読解法をそのまま白話文に襲用したものであり、白話独特の表現描写を的確に訳出することが極めて困難であった。そのため白話小説の訓読翻訳については、後には「俗語文さえも全文書き下しによって「訳」した当叢書は、それ自身がすでに〈古典〉であつて、いまや一般読者はおろか専門家でさえも、読みやすく近

しい書籍であるとは言い難い。」^{〔二十一〕}と指摘されるとおり、少なくとも白話小説にとって最善の翻訳方法とは言いがたかったのである。

(二)「脱」訓読翻訳に向けた模索(幸田露伴・佐藤春夫)

それでは、宇佐美訳発表前後の時期、白話小説の受容方法にはいかなるものがあつたのか。

これについては既に拙稿で論及しているが、大きく五つの方法が確認出来る。それが①白話文を漢文訓読法に則つて翻訳する訓読翻訳、②話柄を残しながら舞台背景や登場人物を変更した翻案^{〔二十二〕}、③白話小説を現代中国語に翻訳する方法^{〔二十三〕}、④白話小説の欧米語訳を活用し日本語に重訳する方法、そして⑤日本語の口語による翻訳である。ただ宇佐美訳が刊行された明治三十一年時点では、白話小説の受容方法としては、訓読翻訳、もしくは翻案かという二種類しか存在せず、受容方法は決して多岐にわたるものではなかった。

管見の限りに於いて、訓読以外の読解方法を体系的に提唱したのは、大正九(一九二〇)年に青木正児が発表した「漢文直読論」が嚆矢である。

青木氏は、(一)訓読は読書に手間取つて、支那人同様に早く読むことができない。(二)訓読は支那固有の文法を了解するのに害がある。(三)訓読は語義の了解を不正確にするという三点を掲げ、例示を交えつつ訓読の弊害を指摘した上で、「解りにくい古言で一度訳して、更に現代語に重訳するやうな面倒な手数を掛けてゐる隙に、音読から直ちに現代語に訳するが賢い方法では無いか。」^{〔二十四〕}と主張し、原文を訓読して書き下し文を作るという二度手間を省き、現代

中国語による音読と、現代語つまり口語訳を行う方が妥当ではないかと指摘している。

白話小説の場合、それに加えて白話独特の文章表現が訓読では充分に翻訳できない。そのため往々にして正確な翻訳に支障を来して来た。そのため専門家の間からも「元来支那の俗語を漢文訓読の方式で読むといふことは無理である。ところが我が支那文学の研究者には、この無理な方法によって俗語を解しようとする人が多い。その結果平気で誤訳することになる。幸いに読者が無知であるから、それで通ってゐる。」^{〔二十五〕}の如く、従来の訓読翻訳方法は誤訳を生む原因として厳しい批判が起こっていた。

そこで訓読翻訳の弊害を回避する方法としてまず注目されたのが、『古今奇談英草子』以来の翻案^{〔二十六〕}の手法を活用し、作品の設定自体を海外に置き換えるというものであった。

幸田露伴は慶応三（一八六七）年江戸の生まれで、明治一四（一八八一）年に菊池松軒主催の漢学塾で漢学を修めた後、一時電信局に勤務するが、文学を志して退職。その後明治二二（一八八九）年に発表した『露団々』^{（つゆだん）}で注目を浴び、続く『風流伝』によって作家としての地位を確立した。彼は当代一流の小説家・思想家である一方、無類の読書家として知られているが、青年時代から湯島聖堂の東京図書館に通い白話小説に耽読したこともあり、中国白話文学には極めて造詣が深く、『国訳漢文大成』では、宮原民平や塩谷温と並んで『水滸伝』や『紅樓夢』の翻訳や論文を発表している^{〔二十七〕}。

その露伴が「三言」所収篇を取り上げたのは、処女作『露団々』である。ここで露伴は例言の中で「趣向はりつとん、さっかしいなんのそのとは大きな嘘にて実は種のある手品なり。慧眼の読者は早

くも観破されつらん。（傍点筆者）」と作品冒頭から典拠の存在を示唆しており、この出典は「三言」の一書である『醒世恒言』巻七「錢秀才錯占鳳凰儔」を翻案し直したものであることが既に確認^{〔二十八〕}されている。

ここで彼は、作品の時代と舞台とを宋代景祐年間の杭州から外国に設定することで、訓読からの脱却を試みている。

参考に『露団々』の第五回を引用すると、文体は左記の通りである。それには、

今しも演説會より歸るさに、後より呼び止られて、靜にふり向き、「じゃくそん君でしたか」「少しお話を仕たうございます」。

「それなら宅へお出なさいまし。此の馬車で御同道しませう」。

と二人共に馬車にのれば、じゃくそん頻りに鞭をあげて連々打にしながら、

「遅い馬です、ああ遅い馬です」。「君の思い程に馳る馬はありませんまい」。

など、ニツ三ツ話すうちに家に來り着ければ直に客室に伴ひ入りぬ。室廣からず、狭からず、別に飾りもなければ、白壁清く明り取る窓の硝子の曇りなき主の胸も知られたり。眞中に据ゑたる卓子の向ふの椅子に、しんじあの座るを待て、「甚だ唐突の事です」が」。

とあるように、本作品では訓読翻訳でなく、当時漸く普及し始めた口語調の表現をふんだんに盛り込んでいる。このように白話小説の受容過程において、外国を介在させることで所謂漢学臭さを抜くと

いう手法は、幸田露伴の方法のほか、一旦欧米語に翻訳された中国白話小説を邦語に重訳するという手法でもあげられる。この春夫による手法は、宇佐美訳発表以後の事例であるが、幸田露伴と同じ傾向を含む所から小論でも言及しておく。

佐藤春夫は白話小説の訓読翻訳から脱却する目的で、欧米の翻訳を一種のバイパスとして重訳した。彼の翻訳『百花村物語』^{〔三十九〕}及び『花と風』^{〔四十〕}を例にして検討すると、『百花村物語』は『醒世恒言』巻四（『今古奇観』巻八）の正文（本文）に、『花と風』は同巻の入話（導入部）を典拠とした作品であり、両作品も『今古奇観』の独訳である Greiner, Chinesische Abende 中の “Der Blumenarr” を使用した重訳で、春夫が白話の原文を直接翻訳したのではない。春夫本人も「独逸文の書物は、舍弟秋雄が私のために読んでくれた。」^{〔三十二〕}と指摘するように、両作品は春夫の弟（秋雄）による独訳と、『今古奇観』の原文とを参考にしながら邦訳を試みたとある。それではなぜ春夫は、欧米語の翻訳を介在させる事を求めたのか。彼はこのように答えている。

春夫本人は一見陳腐な中国小説が西欧語の翻訳されることで「ヨーロッパの表現が支那の気持ち将我々に新鮮なものに感じさせ」^{〔三十二〕}たと指摘し、佐藤春夫の研究者である牛山百合子氏も「ただ漢文を伝習的に読んでいる人の読み方とは違う。新鮮な感じと言おうか、異国趣味と言おうか、そういうものが流れているのが、この日本訳小品の特徴のように思われる」^{〔三十三〕}と説明している。このように、通常中国から伝来した文物の場合には訓読による解釈を経ることが必須であり、その訓読にともなう漢学臭を除去する必要から、欧米言語の介在が必要であったのである。

ここで『百花村物語』の翻訳状況の一端を紹介しよう。北宋朝の仁宗年間に江南平江府の郊外に秋先という男がいた。彼はあらゆる珍しい草花や果樹を集め育てていたので、自分の庭は名花珍種が咲き乱れており、人々は秋先を「花痴」と称していた。その秋先の花園を通りかかった張委は、その庭を手に入れるべく秋先に難癖を付け始めた場面を紹介する。それには、

まだ三杯とは傾けないうちに騒々しく門を敲く声が聞こえてきた。盃を投出して出て行つて見ると、そこには酒臭い息を吹きながら五六人の人間が突立つてゐる。秋公はてつきり花を見に来たなと感づいたものだから門に立ちふさがるやうにして尋ねた「これはお揃いで。一たいどんな御用でございませう。」すると張委が言ふには「こら老爺、お前はこれのおれを知らないのか。町でも名高い張公子といふのはおれのことだ。この辺一たいは張家の領地だ。おれのものだ。聞けばお前の庭にはなかなかいい花がどつさりあるさうぢやがそれはわざわざ出掛けて見に来たのだ。」

（飲不上三杯、只聽得的敲門響、放下酒杯、走出來開門、一看、見站著五六個人、酒氣直冲。秋公料道必是要看花的、便促住門口、問道「列位有甚事到此。」張委道、「你這老兒不認得我麼。我乃城里有名的張衙內、那邊張家莊便是我家的。聞得你園中好花甚多、特來游玩。」）

とある。このように重訳から生じた誤差から若干曖昧な部分も見られるものの、それでも口語訳化されたため訓読翻訳よりも極めて自然な文体で翻訳が行われている。

これら服部誠一・幸田露伴・佐藤春夫から、現在確認されている本邦初の口語訳である松井等による『伝説之支那』^{三十四}までの「三言」所収篇の口語訳の動きを、時系列で並べると左記の通りとなる（参考：本邦初の言文一致体「口語体」小説である二葉亭四迷『浮雲』の発表年も添えた）。

このように宇佐美訳は幸田露伴『露団々』より九年遅れたが、佐藤春夫による重訳や松井等による『伝説之支那』より二四年早く、「三言」所収篇の「最初の散文体による翻訳」であったと言えることが出来る。

- | | | |
|----------|-------|-------------------|
| 一八八三年 | 服部誠一 | 『勸懲繡像奇談』（訓読翻訳） |
| 一八八七～八八年 | 二葉亭四迷 | 『浮雲』 |
| 一八八九年 | 幸田露伴 | 『露団々』（外国を舞台とした翻案） |
| 一八九八年 | 宇佐美延枝 | 『抱甕文庫』 |
| 一九二二年 | 佐藤春夫 | 『百花村物語』（独語の重訳） |
| 一九二二年 | 松井等 | 『伝説之支那』（初の口語訳） |

今回の宇佐美訳の事例は、他言語からの重訳や中国人の助力の事例^{三十五}にも該当しない。また当時研究者の間で行われていた白話小説の訓読翻訳に関する是非についての議論^{三十六}にも言及されておらず、訳本の「自序」にも敢えて訓読翻訳を行わなかった意義について、何らのコメントも見出すことが出来ない。恐らくは訓読翻訳の是非の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。それが結果的に訓読の議論を無視し、口語訳化に向けた既成事実を生み出した可能性も考えられる。

なお、宇佐美による訳業は『抱甕文庫』のみではない、『抱甕文庫』

を刊行した翌月の一八九八（明治三一）年七月には菊の屋女史名義で『花精（一～四）』と題し、読売新聞紙上に『醒世恒言』四卷（『今古奇観』八卷）「灌園叟晚逢仙女」の翻訳を連載^{三十七}している。また同じく菊の屋女史名義で「不幸の幸（小説）」と題して、『大日本婦人教育会雑誌』に掲載^{三十八}されている。

これら新発見の宇佐美の翻訳については、別稿にて後日詳述することとしたい。

おわりに

本論の内容を要約すると、以下の通りである。

I 小論では、筆者が発見した宇佐美延枝の翻訳『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』に注目し、宇佐美延枝が取り組んだ翻訳活動の一端を考察し、先行研究の不備を補完することを目的とした。

II 宇佐美の手による『抱甕文庫』は、「三言」所収篇の翻訳である。宇佐美による「自序」によると、彼女は静養中に「三言」の選集『今古奇観』全四〇篇のうち二〇篇を試訳したが、その後翻訳の存在が哲学書院に知られる所となった。宇佐美の翻訳は書肆の説得の末に刊行され、翻訳の続刊は一〇編まで企画されていた。『今古奇観』の半数に及ぶ翻訳規模と、訓読翻訳が一般的であった明治三一（一八九八）年の時期に、散文体の訳文を試みるなど、翻訳時期を考慮しても短篇白話小説受容史の観点からは看過できない存在と言える。

III 宇佐美の文体は、漢字仮名まじりによる散文体が採用されている。翻訳の姿勢については概ね原文に即して翻訳を試みており、翻

近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

訳水準も低くはない。しかし白話語彙の未習熟のためか、原文をそのまま訳語としているほか、多少内容説明の必要からか、原文になり訳者独自の加筆が散見される。しかし、出版当時白話語彙に関する工具書も十分になく、且つ中国人の助力もない状況で、比較的高い水準で翻訳を刊行したこと、二〇篇の翻訳を行い一〇篇の出版を企画したこと、初めの女性翻訳者であること、そして訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡的な存在として、「三言」所収篇の受容史の上では画期的な存在であると言える。

IV 宇佐美は当時一般的であった訓読翻訳ではなく、散文体による翻訳を採用した。これは明治大正時代における白話小説受容史が直面した問題——すなわち白話小説の口語訳化に関わる一連の問題を解くケース・スタディとして注目に値する。宇佐美訳は白話小説の翻案を試みた幸田露伴『露団々』より九年遅れたが、佐藤春夫による重訳や松井等による『伝説之支那』より二四年早く、「三言」所収篇の「最初の散文体による翻訳」であったと言いうことが出来る。

ただ今回の宇佐美訳は、当時研究者の間で行われていた白話小説の訓読翻訳に関する是非についての議論にも言及されておらず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。

本論文は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究C）「民間の視座を導入した中国通俗文芸の受容と自国化の研究——受容文化の多角的考察を目指して——」の研究成果の一部である。

注

【一】 拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九二〇年代～二〇年代の動向を中心として」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）、同「白話小説翻訳史における宮原民平の存在について——『支那文学大観』の事例を中心に」（『アジア遊学』一〇五号、二〇〇七年）、同「中国通俗文芸受容史における翻訳文体の問題について——佐藤春夫の『百花村物語』を中心として」（『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』燎原書店、二〇〇八年）、同「支那に浸る人——井上紅梅が描いた日中文化交流」（『から船往来——日本を育てたひと・ふね・まち・こころ——』中国書店、二〇〇九年）、同「日本伝統文化の形成を「訓読」から考える——近代日本における白話小説の文体」（『訓読から見なおす東アジア』東京大学出版会、二〇一三年）参照。

【二】 拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——村松暎・魚返善雄の翻訳と翻訳層の交代について——」（『国際文化研究科論集』一七号、二〇〇九年）参照。

【三】 高島俊男『水滸伝と日本人』（大修館書店、一九九一年）参照。

【四】 拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九二六年～一九三九年までの動向を中心として——」（『国際文化研究科論集』一五号、二〇〇七年）、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九四〇年～一九四九年までの動向を中心として——」（『国際文化研究科論集』一六号、二〇〇八年）、同「井上紅梅の研究——彼の生涯と受容史から見たその業績を中心として——」（『勝山稔編』小説・芸能から見た海域交流』汲古書院、二〇一〇年）参照。

【五】 宇佐美延枝 菊の屋女史訳述『抱甕文庫 第壹篇』（哲学書院、一八九八年）参照。

【六】拙稿「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として——」（『国際文化研究科論集』一四号、二〇〇六年）一三〇頁参照。

【七】明治文献資料刊行会編『明治前期書目集成（補巻之三）』（明治文献資料刊行会、一九七五年）五四頁参照。

【八】中島国彦編『文藝時評大系明治篇第四卷（明治三二年—明治三三年）』（ゆまに書房、二〇〇五年）三九・五四・一七一・一七四頁参照。

【九】東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学百年史 通史編（一）』（東洋大学、一九九三年）「哲学書院の設立」（六六頁～六八頁）参照。なお『抱甕文庫』出版直前（一八九八年五月）の哲学書院刊行物リストについては、東京書籍商組合編『明治書籍総目録』（ゆまに書房、一九八五年）二四六～二五四頁参照。

【十】宮武外骨『府藩県制史』（名取書店、一九四一年）二三四頁によると、明治一年の石川県令・千阪高雅への誹謗侮辱事件中に金沢女子師範学校の教員「宇佐美延枝子」があり、その後彼女が東京女子師範学校に明治一六年から一七年にかけて在籍していた。また彦根正三『改正官員録』（博公書院、明治一六年）一四一丁の「附属女児小学校訓導」に「和歌山 宇佐美延枝女」とあり、彦根正三『改正官員録』（博公書院、明治一七年）一四五丁の「附属女児小学校訓導」にも「和歌山 宇佐美延枝女」とあるが、小論における宇佐美延枝と直接の関係があるのかは、現時点では未詳である。

【十一】明治時代に於ける言文一致運動については、山本正秀「明治の言文一致運動」（『國文學・解釈と教材の研究』一〇巻五号、一九六五年）、森岡健二「言文一致体成立試論（近代語の研究）」（『国語と国文学』六二巻五号、一九八五年）、小池清治・鄭譚毅「『言文一致運動』の展開に見る日本・中

国の相違」（『宇都宮大学国際学部研究論集』一二号、二〇〇一年）参照。

【十二】漢代楊宝が雀を救った所、後日雀が白環四個もたらした故事。南朝梁吳均『續齊諧記』「楊寶年九歲時、至華陰山北、見一黃雀爲鷗臯所搏、墮於樹下、爲螻蟻所困。寶取之以歸、置巾箱中、唯食黃花、百餘日毛羽成、乃飛去。其夜有黃衣童子向寶再拜曰、我西王母使者、君仁愛救拯、實感成濟。以白環四枚與寶、令君子孫潔白、位登三事、當如此環矣。」

【十三】晉の大夫魏武子が病氣になった時、息子・魏顆に自分が死んだら妾を他に嫁がせよ言いつけたが、危篤時には殉死させよと遺言した。魏顆は悩んだ末に妾を他に嫁がせた。後日、秦との戦いで顆が秦の勇士・杜回と戦ったが、一老人が草を結んで杜回をつまづかせたおかげで、顆は杜回を捕虜にすることが出来た。その夜、魏顆の夢にその老人が現れ、「自分は妾の父親である。汝が父親の命令に従ったからこの恩に報いたのである。」と言った故事。「春秋左氏伝」宣公十五年「魏武子有嬖妾、無子。武子疾、命顆曰、必嫁是。疾病、則曰、必以爲殉。及卒、顆嫁之、曰、疾病則亂、吾從其治也。及輔氏之役、顆見老人結草以亢杜回。杜回躓而顛、故獲之。夜夢之曰、余、而所嫁婦人之父也。爾用先人之治命、余是以報。」

【十四】宇佐美延枝「自序」『抱甕文庫』（哲学書院、一八九八年）七頁参照。

【十五】市川清流『雅俗漢語訳解（上・下）』（宝文堂、一八七八年）参照。

【十六】明治時代における漢語辞書については、松井栄一編『明治期漢語辞書大系』（大空社、一九九五～九七年）があり、本叢書だけでも五八種もの辞書を収録している。

【十七】服部誠一（撫松）『勸懲繡像奇談（一編）』（九春社、一八八三年）参照。

【十八】関儀一郎・関義直編『近世漢学者伝記著作大事典』（一九四三年初版、一九六八年汲古書院より再版）四〇二頁参照。

【十九】「三言」に取り組んだものとして岡白駒と沢田一斎の翻訳になる『小説

精言」(寛保三年・一七四三)・小説奇言」(宝暦三年・一七五三)・小説

粹言」(宝暦八年・一七五八)があげられる。「三言」と同じく三部作である所から「和刻三言」と呼ばれている。享保年間以来中国からの書籍の輸入は増加したものの、基本的には官用が優先されたため、個人で舶来の書籍を入手することは不可能に近かった。そのため、白話小説の原文を活かしつつ、それを日本人に読みやすい形で紹介したのが「和刻三言」である。

当時の「白話通」で知られた岡白駒や沢田一斎による翻訳方法は、翻案を旨とした都賀庭鐘と異なり、「三言」という素材を最大限活かした訓訳本というスタイルを選んだ。訓訳本とは、原文に句読点や返り点や一二点等の訓点をふり、あまりに口語的な表現の所には(例えば「這裏」には「コチラノ」とか「若是沒有」に「モシナケレバ」のように)文字の左側に訳文を施し、解釈の説明が必要な語彙については、巻末に「釈義」を設けて読者が通読しやすいよう配慮している。詳細は村上雅孝「岡白駒と訓訳」『国語学研究』五四号、二〇一五年)参照。

【二十】服部誠一『孫呉講義』(誠之堂、一八九六年)、同『漢文読本卷之一』(育英舎、一八九八年)参照。作文や書道関係のものとしては、同『新撰記事論説作文軌範』(水野書店、一八九六年)、同『中等教科作文全書』(水野書店、一九〇一〜〇二年)、同『芸能科習字への道』(東京修文館、一九四二年)、同『書道』(研究社、一九四八年)参照。

【二十一】前川晶『塩谷温と『支那文学概説講話』』(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』四号、二〇〇一年)三頁参照。

【二十二】幸田露伴『露伴々』(『都の花』金港堂、九一四、一七、一九、二〇号、一八八九年)参照。

【二十三】金国璞『北京官話今古奇観(第一編)』(文求堂、一九〇四年)、同氏『北京官話今古奇観(第二編)』(文求堂、一九一一年)参照。

【二十四】同氏著『漢文直読論』『青木正児全集(第二卷)』(春秋社、一九七三年)三四一頁参照

【二十五】宮原民平『翻訳雑感』(『東洋』第三〇巻第六号、一九二七年)参照。

【二十六】日本人が最初に「三言」と正面から向き合ったものとして、近路行者こと都賀庭鐘による『古今奇談英草子(英草子)』(寛延二年・一七四九)がある。『英草子』は九編の物語から構成されており、その幾つかに「三言」の作品が用いられている。手法としては作品をそのまま翻訳したのではなく、翻案の手法を選んでいる。敷衍すれば『古今小説』や『警世通言』所収の短篇白話小説のプロットをベースにしながら、その作品舞台を鎌倉・室町時代の史実にあてはめ、訓訳翻訳ではなく文体も読みやすく仮名まじりの読み下し文に加工するという方法である。『英草子』は従来の小説に見られぬ斬新性が注目され、「三言」の最初の翻案小説というより、読本の先駆的存在として広く知られている。なお都賀庭鐘はその後続編にあたる『繁野話』(明和三年・一七六六)を刊行し、この際も『英草子』と同様に『古今小説』や一部唐代伝奇小説を加えて翻案した歴史小説として、後の読本作家に大きな影響を与えたことも知られている。詳細は崔香蘭・張紅艶『「警世通言」と「英草子」における「莊生鼓盆」説話の利用法——通俗性から現実性への変容』『東アジア日本語教育・日本文化研究』一六号、二〇一三年)参照。

【二十七】露伴学人「古支那文学に於ける小説の地位」(『斯文』第八編第六巻、一九二六年)のほか『水滸傳(上・中・下巻)』(『國譯漢文大成(文学部第一八二〇巻)』、國民文庫刊行会、一九三二四年)、また『紅樓夢(上・中・下巻)』(『國譯漢文大成(文学部)』、國民文庫刊行会、一九二〇〜二二年)は、平岡龍城との共訳の形で発表している。なお幸田露伴の中国文学との関わりについては、井波律子「幸田露伴と中国文学」(『東方

学会創立五十周年記念東方学論集」東方学会、一九九七年）、中川論「幸田露伴と中国古典小説」（『季刊日本思想史』五七、二〇〇〇年）を参照のこと。

【二十八】白話小説の翻案であることを説明するため、『露団々』と『醒世恒言』巻七「錢秀才錯占鳳凰儔」とについて若干補説する。まず『露団々』のあらすじは、以下の通りである。

①ニューヨークの富豪ブンセイムは、新聞広告で一人娘の結婚相手を募集した。花婿は学歴・容貌・財産の有無・人種・宗教を一切不問とし、ただ一つの条件が「決して不愉快な感覚を起こさず、常に愉快に生活すること」というものであった。①とある中国人の依頼により日本人（吟蝸子）が替え玉で応募することとなったが、②数多くの応募者の中から替え玉の日本人が選ばれた。しかしその一人娘には相思相愛の恋人がおり、それを知った彼は娘の前から去り、二人はめでたく結婚する。③その後吟蝸子が帰郷した折に、替え玉を依頼した中国人と言い争いになるが、その時に通りがかった県知事が取り調べ、替え玉依頼者の欺瞞を断罪されることとなる。その後吟蝸子は再びブンセイムに賓客と迎えられ、二人で世界漫遊の旅に出た。

その上で元ネタとなった『醒世恒言』巻七「錢秀才錯占鳳凰儔」のあらすじは、次の通りである。

①太湖西山に住む大富豪の高賛は、娘のために結婚相手を探していた。花婿は優れた才能と容貌を兼ね備えた男性であれば聘財の多寡を一切問わず、必要なら結婚資金も提供すると公言した。その噂を聞いた①呉江の顔俊は自ら立候補したものの、高賛が直接面談に来ると聞くや、慌てて従兄弟の錢青に替え玉を懇願した。錢青は渋々引き受けて高賛と面会したが、②替え玉の錢青は品格もあり、高賛は結婚を快諾した。婚約手続（親迎）

も錢青が引き受け高家に赴いたが、天候の都合でそのまま高家に足止めとなり、結局そのまま本番の婚礼まで挙行してしまった。③錢青が帰郷した折に、替え玉を依頼した顔俊と言い争いになるが、その時に通りがかった県知事が取り調べ、替え玉依頼者は懲罰を受けることとなる。その後錢青は再び高家と迎えられ、後には科挙及第の栄誉を得た。

両者の比較のために主要なプロットに傍線を付したが、一読しても、①富豪が自分の娘の婿を広く募り、応募者が替え玉を働くこと。②替え玉が難関を突破し、花婿に選ばれること。③替え玉が帰郷の際に本来の応募者と争いとなり、居合わせた県知事の裁定が下されること。などの作品の物語展開が酷似し、舞台設定を除けば寧ろ相違点を見出す方が難しい。また『露団々』の冒頭にも露伴自身が「素より遊戲三昧の業なれば、談道德に渉るも世を醒ますの力もなく、意卑劣を憎めども人を励ますの勢もなし。唯ただあわれと見給えかしと云うも、作者の恒言かや。」と「例言」の中で典拠となる『醒世恒言』の題名を故意に挿入しているところからも、『露団々』は「錢秀才錯占鳳凰儔」の翻案作品であることは疑いのない所である。柳田泉『露伴研究』（『隨筆明治文學（正）』（春秋社、一九三八年）、塩谷賛「『露団々』と『白眼達磨』——露伴の二作」（『文學』岩波書店、三九——、一九七一年）、二瓶愛蔵「露伴小説の中国原話考」（『季刊文學・語学』六〇、一九七一年）、日沼晃治「露伴（露団々）考」（『埼玉大学紀要教育学部（人文・社会科学）』四四卷一号、一九九五年）参照。

【二十九】佐藤春夫『百花村物語』（『改造』第四卷第一〇—一一号、一九二二年）参照。

【三十】佐藤春夫「花と風」（『女性改造』創刊号、一九二二年）参照。

【三十一】佐藤春夫「玉簪花」自序「定本 佐藤春夫全集（第三四卷）」（臨川書房、二〇〇一年）一四三頁参照

近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について

【三十二】佐藤春夫「玉簪花自序」「玉簪花 支那短篇集」(新潮社、一九二三年) 参照。

【三十三】牛山百合子「作品解説」(『佐藤春夫全集(第九卷)』講談社、一九六八年) 六四四頁参照

【三十四】詳細は、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」の受容について——新たに発見された松井等の事例(一九二二)を中心として——」(『国際文化研究』、二〇号、二〇一四年) 参照。

【三十五】外国人による助力については、拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——新たに発見された桃義会(一九二四)の翻訳事例を中心として——」(『国際文化研究科論集』二〇号、二〇一二年) 参照。

【三十六】詳細は拙稿「近代日本における白話小説の翻訳文体について——「三言」の事例を中心に——」中村春作編『続「訓読」論——東アジア漢文世界形成——』(勉誠出版、二〇一〇年) 参照。

【三十七】「花精(一)」『読売新聞』(一八九八年七月二五日、月曜付録二面)、「花精(二)」『読売新聞』(一八九八年七月二六日、朝刊三面)、「花精(三)」『読売新聞』(一八九八年七月二七日、朝刊三面)、「花精(四)」『読売新聞』(一八九八年七月二八日、朝刊三面) 参照。

【三十八】菊の屋女史訳「不幸の幸(小説)」『大日本婦人教育会雑誌』(一〇八号、一八九八年一〇月) 四八頁参照。